

Rotary: "The Best is Yet to be"!

ロータリーの最善はなされていない

タイトルに拝借した英文は、ロータリーにおける有名な警句として知られている。これは、国際ロータリー前事務総長ジョージ・R・ミーンズ氏が、永年勤め上げてその職を辞するに当たってのメッセージの一節であり、当時、日本では「ロータリー未だし」と、シンプルに迫力をもたせて訳された。即ち「ロータリーの最善は未だ為されていない」と、私は解釈している。心すべき痛烈にして貴重な至言である。

一方、ロータリーの創始者ポール・P・ハリス氏は、かつて来日したとき遺した言葉に、「すべてがうまくいっていると思うなら、神よあわれみ給え、ロータリーの終焉は近づいている」と。而して更に「有難いことに、ロータリーは、どの部分も改善せずによいという個所はない」と、明言している。ジョージもポールも、ロータリーの先覚者として、すいも甘いも判っているのである。

判らぬのは誰れか、それはロータリーに無垢なる年数浅き会員の責任ではない。それらを指導すべき役割りを課せられている人々の不勉強であり、経歴と年数を重ねている先輩会員の怠慢であろう。「ロータリーは素晴らしい！されど現況、これでいいのか？」の、声が聞かれる所以である

ロータリークラブは親睦に始まるが、単なる社交団体ではない。ロータリー精神を探求し、それを身につけ実践せんとする人々のチームであり、結合体である。

毎週会合する例会は、親和のグラウンドでもあるが、よりよき修練の道場である」と、鮮明に表現されている。そして、この道場に学ぶロータリー精神とは何か、それは一九二三年の第三四号議案として、時の国際大会に採択され、確立された二つの原則、世に謂う「二三―三四」に明確である。

その一つは、「Service above Self」で、「超我の奉仕」或いは「サービス第一、自己第二」、更にせんじ詰めて「他人への思いやり」という哲学である。

もう一つは、「He Profits most who Serves best」であって、「最もよく奉仕するものに最大の利得（恵み）がある」という実践を基礎にしている倫理である。この二つを更に具体的に、ロータリー精神のものさしとして表現したのが「四つのテスト」であり、私流には、社会生活の土台としての「ロータリアン信条」である。即ち「うそ、偽り、無理は

ないか」、「正々堂々筋が通っているか」、「善意と友情に徹しているか」、「世のため人のためになるか」の四ヶ条である。

これらが100%実践されているとしたら問題はない。が、それは努力を要する至難事。というところにロータリーの存在意義がある。即ち「ロータリーは、自己の為に利益を得ようとする欲望と他人の為に尽くそうとする義務感にはさまれて、心の中に起る争い、葛藤を和解調整しようとするものである」と、求道の精神が明言されている。しかも、これにつながる哲理に、「なさは人の為めならず」、「積善の家に余慶あり」、「因果応報」などの訓えがある。

ロータリーは、こうしたロータリー理念を、特にそれぞれの職業を通じて実践するを眼目としているところに、重大な意義と特長があり、ロータリーのゆるぎなき根幹をなしているのである。

極言するなら、ロータリーはこの一事に尽きると言っても過言ではなからう。しかるにロータリーの現情はロータリーの正道、修練への開花が忘却されんとし、邪道に花が咲き乱れている感が深い。

今はなき柿下正道博士は、昭和二八年私と同期の金沢RC入会であるが、「ロータリーは、人間を人間らしくするところ」と、かつて私にアドバイスされた。不朽の名言であると思

う、こんな人こそ指導者がバナーとなって欲しかったと追憶を禁じ得ない。

クラブの長大を誇るの愚かであり、入会年数の多きをもって自慢にはならない。安積得也氏は「歴年数や会員数の長大なるをもって貴しとせず、模索的努力の充実度こそ貴重なり」と、看破された。味うべき忠言である。長大クラブ、古参会員は今こそ、謙虚に反省し、衿を正さねばならない。新クラブ、新会員は、ロータリーの真実と取組む意欲をかき立てねばならないと想う。

新しい年を迎えんとして、わが反省の辞としたい。

(金沢北RC 会報No.五六 昭和五〇年十二月二十五日)

ロータリー“四”の戒律

日本人には古くから“四”をいみ嫌う悪弊がある。“死”に通ずるからであろう。他愛もないことながら、病院に四号室がなく、近代ホテルさえ四号室をつくらないのがあり、電話番号にさえ“四”が敬遠されるらしい。

ところが、ロータリーでは、あれもこれも“四”で固められ、まとめられ、柱にさえなつて、“死”どころか、ロータリーの生きる原動力となつているのは面白い対照である。

- ④ 先ずロータリーの綱領、目的は四カ条から成つている。要約すると
- (1) 広く知己を求めて奉仕の機会を多く持つ。
 - (2) 各自の職業に誇りをもつてその道徳的基準を高める。
 - (3) 公私の別なく奉仕の理想を実行する。
 - (4) 国際的にも理解と友情を広めかつ深める。

⑤ ロータリアンの社会生活の基本、言動の尺度を示す“四つのテスト”は、もちろん四カ条からできている。

- (1) 真実かどうか。
- (2) みんなに公平か。
- (3) 好意と友情を深めるか。
- (4) みんなのためになるかどうか。

⑥ ロータリーは、その理想を実現するため四部門によつて構成されている。

- (1) 国際奉仕。
- (2) 社会奉仕。
- (3) 職業奉仕。
- (4) クラブ奉仕。

⑦ ロータリーの会員には四種類がある。

- (1) 正会員。
- (2) シニア・アクティブ会員。
- (3) パスト・サービス会員。
- (4) 名誉会員。

⑧ 一九〇五年二月二三日、シカゴ、ディアポン街のユニティ・ビルの一室にて、ロータリーは呱呱の声をあげた。時のメンバーはポール・ハリス（弁護士）。カスターバス・ローア（鉱山技師）。ハイラム・ショーレー（洋服屋）。シルベスター・シール（石炭商）の四人であつたのは奇縁である。

⑨ ロータリーのマーク、歯車は二四枚からなつている。

⑥ 国際ロータリーの理事は永年に互り十四名であったが近年ようやく増員された。また新会員が最終的に決定するまでには十四段階を経なければならぬ。と永い間言われてきたが、これも近年圧縮簡素化されるに至った。

⑦ こうして、作意か偶然か、ロータリーにおける「四」の因縁は深い。かくして「四」に便乗して四カ条にまとめられたものも多くある。そのひとつロータリーの会員には次の四種類があると言われる。

- (1) ロータリー屋。バツヂを悪用する人。
- (2) イータリアン。飯をたべたら帰える喰い逃げの人。
- (3) 老タリアン。若くてもロータリー意欲の欠けた老化現象の人。
- (4) 奉仕に徹した名実ともロータリアン。

⑧ 金沢北RCの「ロータリアン信条」は「四つのテスト」にまさる名表現と言われる人もあるが四カ条である。

- (1) うそ、偽り、無理はないか。
- (2) 正々堂々筋が通っているか。
- (3) 善意と友情に徹しているか。
- (4) 世のため人のためになるか。

⑨ ロータリアンとは、

- (1) 労を惜しまぬ人。
- (2) 他人の身になる人。
- (3) 利にフェアな人。
- (4) 安心できる人。

⑩ クラブ奉仕とは。

- (1) クラブの例会に出席して親睦を深める。
- (2) クラブの諸計画には積極的に参加する。
- (3) クラブの役員や委員となって協力する。
- (4) クラブの経費を負担し、奉仕に努める。

⑪ 職業へ献身のロータリーに。

- (1) 職業へ献身のロータリーに。
- (2) 形より内容のロータリーに。
- (3) みんなで動かすロータリーに。
- (4) 親睦深めるロータリーに。

⑫ 而して目的遂行のため。

- (1) 忠実に。
- (2) 和やかに。
- (3) 積極的に。
- (4) 継続的に。

⑬ こうした義務感の反面、ロータリアンにはどんな利点、恵みがあるか。

- (1) 世界一五一カ国七八万人、日本国内一三〇〇RC七万人の親友がある。
- (2) ロータリアンは有形無形の社会的信用を享受している。

- (3) ロータリー活動を通じて社会に奉仕できる。
(4) ロータリーを通じて広く知識と教養が得られる。

① 最後に、金沢北RCの会員は今日現在（三月末日）四四名である。この内スポンサーの金沢東RCより移籍したのは、大村、越野、山田、柴田ら四名の諸君である。理事は一四名に一名不足の一三名であるのは残念？。

（金沢北RC 会報No.六二昭和五一年四月一日）

恩を施すは務めて報ぜざるの人に施せ

（施す恩務施す於不報之人）

人に恩義を施すばあいには、なるべくその恩義に報いようとしないうな人にこそ施すがよい。恩を施してその報酬を求めるような気持ちを抱くことは絶対よくないことだ。

“七つの驚き”に想う

クラブ例会の転回を願って

ロータリーにおける、いかなる会合にも優先して貴重なのは、毎週一回の例会である。何故なら、クラブは例会を基盤に成り立っているからであり、例会は会員相互が友情を拡め深め合う広場であり、ロータリーを学び磨く修練の道場なるが故である。しかるに、果して、その最善がなされているだろうか。

誰れもが、判で押したように、十二時三〇分に早やからず遅からず会場に顔を出し、出席登録し、テーブルに着く。定刻には型の如く会長の鐘を合図に起立、ソングを歌い、やがて食事につく。隣り近所の人々に話かけたり、かけられたり、口をモグモグさせながら時には奥歯にモノのはさまったままのやりとりも束の間、会務報告から講話へと時は流れゆく。もちろん、この間のおしゃべりはご法度である。かくして閉会のゴング。

十三時三〇分には、それぞれ、あたふたと会場を散ってゆく……これで一巻の終りである。

私は思う。平穏な連続に異論はないが、無感動なマンネリ化がこわい。言うまでもなく、会務報告には聴き耳を立てるし、講演には訓えられ、学ぶところも多く、いづれも例会の重要なプログラムである。が、親睦と修練、会員相互の切磋琢磨し合う貴重な機会にしては、物足りなさが無いだろうか。今ひとつ踏み込みが不足し、画龍点睛をかく憾みはないだろうか。とする不満は既にある。ここに例会の在り方への転回に併せて時間延長を検討する所以がある。と、安積得也先生は提唱され、ロータリーの本拠アメリカの例会には一時間三〇分のところが多く、内容ある成果をあげていることを指摘された。

先般のICGFにおける先生の基調講演「四つのクラブの七つの驚き」がそれである。即ち、アメリカの四つのRCを訪問した実感では、祈り、笑い、転回、結合、体温、質問、そして時間があつた。と論破された。宜なるかな、日本のロータリーに不足するもの、欠けるものが、ここでは充実し、例会の成果の大きいことを評価されている。

私は、安積先生のご提言をかりて、日本の例会の在り方、望ましい姿を祈・笑・転・結合・質・時へ置きかえて考察して視た。

(1) 祈りが欲しい……例会に歌うソングは誓いの言葉でもある。このあと十秒でもいい「ほんとうに、そうでありますように」と、祈りが加わったら、よりベターではなからうか。

(2) 笑いが欲しい……日本の例会には笑いに乏しいのは事実である。軽妙なジョークが、和やかなふん囲気に変ずる。のみならず、それがニコニコBOXにつながれば、その反映は大きいだろう。

(3) 転回が欲しい……日本中の例会はどこもかしこも千変一律、官僚的に統制されているかの感さもある。クラブ毎に個性豊かな、しかも、一本筋の通った中に楽しい発想があつたら、メイクアップも一段と価値あるものとなろう。

(4) 結合が欲しい……会員はお互い、カミシモを脱ぎ胸襟を開き合つてこそ同志的結合となろう。日本ロータリーの巨星、東京東RCの佐藤千寿。パストガバナ―は「ネクタイをはずして、フンドシは固く引き締めよ」と、形より心であることを訓えておられる。体温が欲しい……これは重大である。隣り合わせて一時間、終始無言のうちに別れてゆくなら、ロータリーの友情よ、いずこに……と言いたい。一期一会の温い心構えこそ肝要。

(6) 質問が欲しい……例会がロータリーの修練の道場であり、学舎であるなら、質問の出ないのが不思議である。語り合い、話し合い、質し合つてこそ、理解と進歩と友情が深まるのではなからうか。

(7) 時間が欲しい……これこそ、例会充実への骨格である。長い慣例もあり、例会は事務

的には一時間とし、そのあと三〇分を延長して自由懇談の機会をつくろう。新しい充実と、大きな収穫をもたらすであろう。

私は、安積先生の識見に敬意と共感を表しつつ、七つの驚きが、七つの前進となり、日本ロータリーの Lucky Seven たらんことを希って止まない。

(金沢北 R C 会報 No. 六七 昭和五一年六月一七日)

父母に事^かえて、能^よくその力を竭^つくす

(事^ニ父母^ニ能^ク竭^ク其^力カ)

できるかぎりの力をつくして、父母につかえることだ。親孝行の道を実践することが、すべての道に通じる人間の生き方である。

徳孤ならず、必ず隣りあり

京都洛北 R C との提携結実を歡びて

一九七六年七月二二日は、創立三周年をやがて迎えんとする金沢北 R C にとって、明暗喜悲の両頂点をゆく忘れられない日となった。その「暗と悲」は、私のロータリーへの歡喜を冒瀆するので、さておき。その「明と喜」はいままでもなく、京都洛北 R C と、われらの友好提携、結実の最良の日となったからである。

洛北さんは、この日大西友二副会長（愛称京都のポールハリス……それ程よく似ている）を始め八人の人々が大拳、心をこめてお越しくくださった。いずれも、京都洛北をして「世界唯一の R C」と、かつてのロビンズ R I 会長を感嘆せしめるまでに僅か二カ年で築きあげるに、ブルトナーとなり、「D 五一」となって驚進し、偉大な索引力となった人々である。

若さが漲っている、意欲に溢れている。「ロータリーの口も知らぬ人達ばかりでスタート

して、ただまっしぐらに走り続けた」と、そのお一人、「D五一」第一号のニックネーム保持の初代幹事源田さんは述べられた。さもありなん、京都洛北の今日ある秘密は此処にあった。ロータリーは理論ではない。実践であり、実行力いかんであり、その大結合にこそクラブの成果があがるのだ。

金沢北RCは、最高の良縁を得た。が、友好提携は単なる親睦ではない、もちろん遊戯ではない。提携要項の第一条は「相互の親睦を深め、知識の交流と、クラブ活動の積極化のため、相互により影響を与え合う。」第二条に「謙虚に質実、形より内容の充実を」と明示されている。われらは、この初心を忘れないで、提携と喜びの実をいつまでも続けようではありませんか。

この日早朝、大村修練委員長と同行、高岡の宿舎にガバナー田山さんを訪問し、石川県ロータリー研修会”の自主撤回をお達し、併せて、窮地に立たされたであろうガバナーに真情と表敬の意を披歴した。今日はクラブにとっては、かつてない大きな明暗の日であった……。

「徳孤ならず、必ず隣りあり」と、近頃、安積得也先生に訓えられたばかりである。

(金沢北RC 会報No七〇 昭和五一年七月二十九日)

パストガバナーについて

「友」四月号三〇頁の「ガバナーノミニーについて」と題する所論を読んで、無冠の一会員として、おこがましいとは思いますが、事は、われらの地区の、しかも、大きな影響力をもつ指導層に起った問題だけに、わびしきを感じつつ無関心では済まされぬ。それがロータリーの本質にふれる論戦なら頼もしい限りだが……。

権限とか、権利とか、論議される以前に、ロータリーらしく、相手の身になる思いやりと豊かな良識が先行して欲しいのではなからうか。先生方は口を開けば、その実践を訓えられてきたと思います。

ガバナーは任期を終わったとたん、一ロータリアンにかえるのであり、過去の人となるがその貴重な体験を謙虚に、爾後のロータリーに寄与くださるなら、この上ない幸いである。一方ガバナーノミニーは期待されつつ、やがて重責に就かんとするこれからの人である。ただし、厳然としているのは現ガバナーである。その任期一カ年は地区における唯一の管

理者、責任者としてR Iの役員であり地区の誰からも束縛をうけることなく、存分なる能力の発揮が望まれる。また地区幹事、分区代理はガバナーの重要な補佐人であり助言者であらねばならぬ。

パストガバナーは、現ガバナーに対して良識ある、相談相手としての立場を堅持していただいたらと思う。

（「ロータリーの友」昭和五十一年八月号）

あやまちを改めるに吝かならず

（改し過不吝）

あやまちを改めることにためらってはならない。

ロータリー創立記念日を迎えて

反省、そして原点を見つめよう

最初のロータリークラブは、一九〇五年（明治三十八年）二月二三日シカゴにおいて、弁護士ポール・ハリスなど四人の人達によって誕生した。

それから満七二年、今や全世界一五一カ国、一七、〇〇〇を超えるクラブ数、八〇万人になんなんとする会員を擁するまでに至った。

さて、この偉大なる発展、持続の秘密は何であろうか。……創立当初は、会員間の職業上の相互扶助と友好親善の二つを目的としたようである。私は想う、これだけであつたらロータリーは今日の拡大、持続は見なかつたであろう。ところが、最初から、会員は一人を原則としたこと。政治上、宗教上の論争を禁止したこと。会務は互譲の精神で輪番制を採ったこと。出席をクラブ活動の根本義務としたことなど永続の一因として無視することは出来ない。が、これだけではない。もっと大きな根本的なものがあろうことを確認

しようと、私は多くのロータリー文献を追いつつ探求した。

その第一は、最初のシカゴクラブが創立した翌年の一九〇六年一月、会員の中から、クラブの目的として、相互扶助と親睦だけでは満足出来ない。と、追加されたのが「シカゴ市の最善の利益を振興し、会員間に市民としての誇りと忠誠の精神を鼓舞すること」であった。けだし、追加されたこの一項が、やがて全米に拡がる大きな原動力となったであろうことは想像に難くない。……素晴らしき英知であった。

これだけではない更に四年後の一九一〇年八月には、五カ条からなるロータリー最初の綱領を決定した。その第四条に「進歩的で、尊敬すべき商取引の方法を推進すること」とある。正にロータリーの根幹となる職業を通じて社会に奉仕する理念のスタートである。これが、次第に全世界の良識をゆさぶり起こす支柱となったのであろうし、ロータリー大躍進への前提となったことは固く推察されて止まない。

第三には、一九一五年において、十一カ条からなるロータリーの倫理訓が決議された。その全条いずれも、ロータリー今日の発展を約束する……いわゆるクリーンなる大指標である。全文をここに掲げることが省略して、特に私の感銘深き二つをご紹介します。

第二条……わが身を修め、わが能率を向上し、わが奉仕を拡大すべきこと。そうすることによって、最も良く奉仕するもの、最も多く報いられる。というロータリーの基本原則

に対して忠実なることを立証すべきこと。

第三条……われらは実業人であり、成功の野心を抱いていることを認める。同時に、道徳を重んずる人間であり、最高の正義と道義に基づかざる成功は、これを欲するものではないことを自覚すべきこと。

私は更に想う。ここにおいて、ロータリーの永遠なる生命、崇高なるロータリー精神の基礎が確立したのである。五年刻みの大躍動である。私が、ロータリーの一節（ふし）は五年と提唱する所以の一つである。五周年、十周年等々の祝典は日本のロータリーによく見るところであり、それは結構である。が、仮りに五年間を啼かず飛ばず無為に過ごして、ドンチャン騒ぎ、若しくはスタンドプレー的な形だけの事業で、お茶をにごすような事ではないのだろうか。と思うことがある。

創立記念日の趣旨は、原点に返えることであり、初心忘るべからずの教訓を思い起こすことであり、先達の偉業に学ぶことであらうかと考える。ロータリー創立、クラブ創立、わが事業の創立、わが職業のスタートの当時を思い顧みて、覚悟を新たにする意義は大きい。記念すべき日は忘れてはなるまい。

（金沢北RC 会報No.八五 昭和五二年三月三日）